

令和2年度 【市町名】認知症地域支援推進員活動報告

【三田市】の認知症地域支援推進員について

1 認知症地域支援推進員：1名

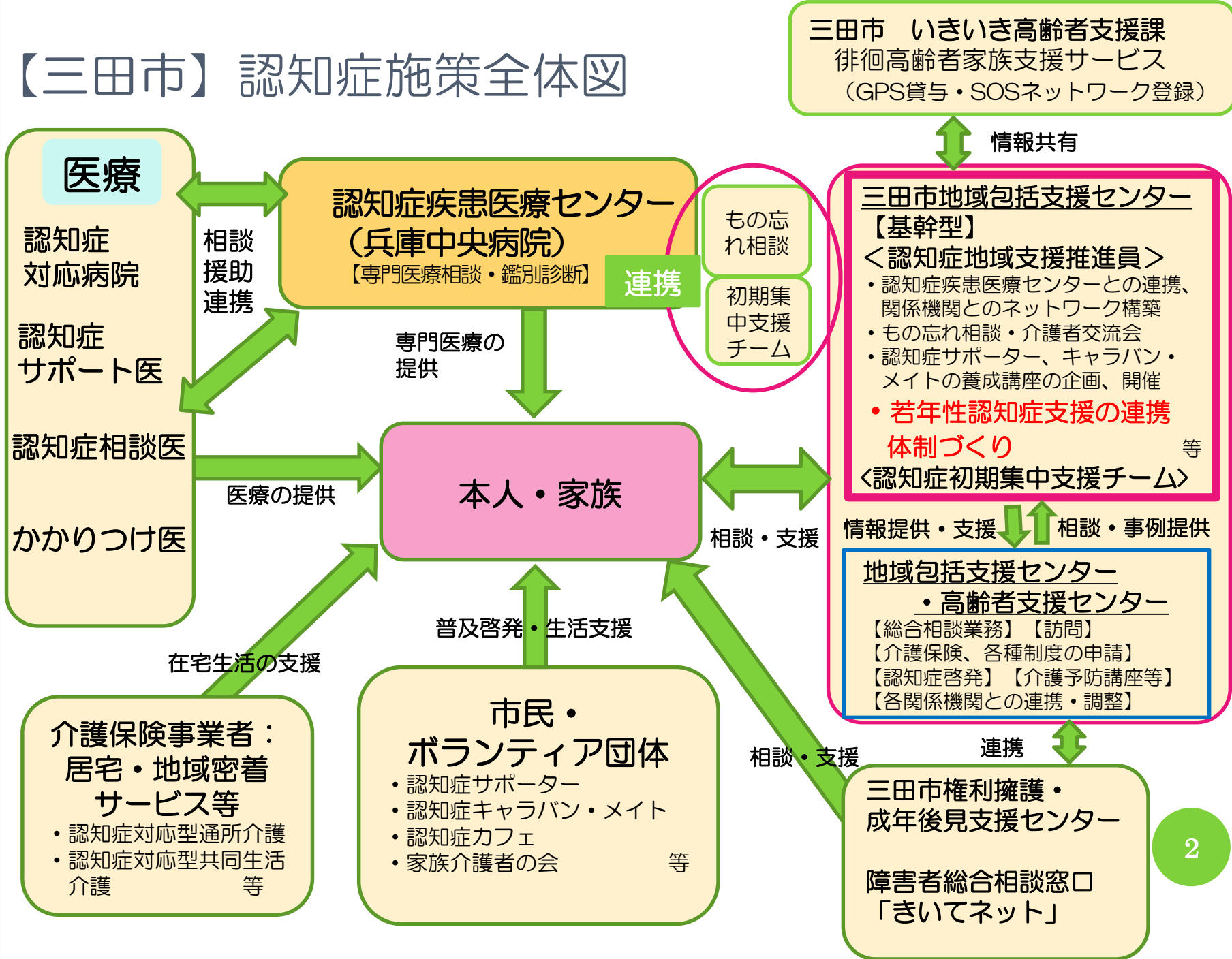
2 認知症地域支援推進員の役割

認知症の人への効果的な支援を行うために、医療、介護、及び生活支援を行うサービスが有機的に連携したネットワークを形成し、医療と介護の連携強化や地域における支援体制の構築を図る。

- 関係機関と研修会等を開催し、認知症ケアのスキル向上を目指す。
- 認知症関係の事業を実施する関係団体との連携を図る。
- 認知症初期集中支援チーム実施、整備の推進役となる。
- 認知症の当事者及びその介護者等を支援するための居場所づくり。交流会の実施。
- もの忘れ相談の実施。
- 若年性認知症の人への適切な支援の検討、実施。

報告者氏名：寺坂梨沙 池田聡美

【三田市】認知症施策全体図



【三田市】 R2年度認知症地域支援推進員具体的活動報告

テーマ番号< 5 > 標題：若年性認知症の人と家族への個別支援

(1) きっかけは認知症疾患医療センターからの相談

【Aさん】

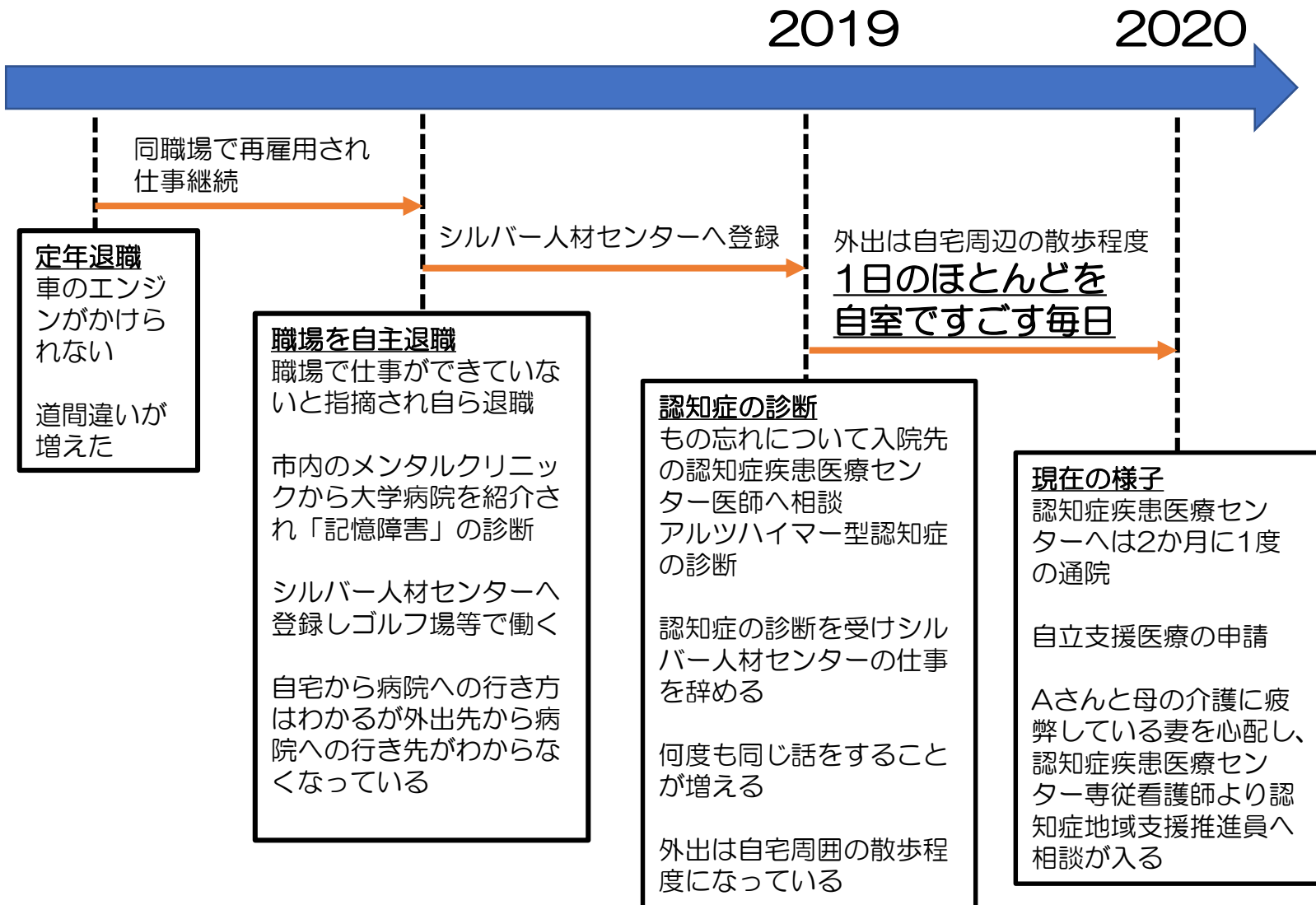
- 60代男性：アルツハイマー型認知症
- 要支援1（支援途中で要介護1へ）
- 本人、妻、妻の母と3人暮らし。
妻の母も認知症(要介護2)で介護サービスを利用中。
- 1年前に認知症の診断を受け、自宅にこもりがちの生活が続いている。

【相談内容】

- 妻1人が介護と家事全般を抱えている状況。妻は何も手につかない、何もしていなくても涙が出てしまうと話される。
- Aさんは自分に出来ることは何でもしてみたいと話しているため居場所探しができないか？地域にそのような場所がないか知りたい。


若年性認知症の人と家族への個別支援

(2) Aさんのこれまでの経緯



若年性認知症の人と家族への個別支援

(3) まずは本人と妻の思いを聞いてみる

- 
- 認知症と診断を受けてから続けているのは散歩くらい。
 - 妻にはいつも**申し訳ない**と思っている。
 - 自分にできることがあるなら何でもやってみたい。**仕事がしたい。**しかし**人に迷惑をかける**のではないかと心配。



- 母の介護をしながら夫と常に一緒の時間を過ごすことが**しんどい。**
- 母、夫のこと、今後のことを思うと勝手に**涙が溢れて何も手につかない。**

2人のためにどんなお手伝いができるだろう…？

若年性認知症の人と家族への個別支援

(4) 認知症地域支援推進員として行ったこと

- 月に2回実施している認知症疾患医療センターとの連携会にてAさんや妻の状況について情報共有。連携会だけでなく状況に変化のあった場合等も密に連絡を取り合った。
- 妻の思い、Aさんの思いをそれぞれに聞き取る。
包括相談員、家族の状況をよく知る母の担当ケアマネジャーとも連携し現状確認。支援の方向性について共通認識を持ってもらう。

- ⇒ • ボーイスカウト活動やシルバー人材センターへ登録をしていた経験を活かし、就労やボランティア活動へつなげるサポートを行うこととなる。
- また、Aさんの社会参加・外出の機会ができることで家族の疲弊軽減を図っていくことに。
- ⇒ • ハローワーク、障害者就業支援センター、地域福祉支援室、ボランティア活動センター等へ相談。就労先をみつけることができなかったが、通所Bでの庭作業ボランティア（有償）として参加することとなる。

若年性認知症の人と家族への個別支援

(5) Aさんを取り巻く環境の変化

- 通所Bでの有償ボランティア以外にも社協で行われるボランティア活動へ積極的に定期参加している。
- ボランティア活動を通して近隣住民や地域の民生委員とつながりができた。
- 推進員がキャラバン・メイトへ協力依頼を行いAさんとともにボランティア活動へ参加。また、キャラバン・メイトが地域で開催している男性介護者の会へ当事者として参加を始め、参加者同士で交流を深めている。
- 自宅から通所Bまでの道のり30分程を徒歩で通い続けている。時折道迷いがあるため家族と相談しヘルプマークの申請を行った。通所BのスタッフがAさんの到着時刻に変化がないか見守りをしている。
- 母のケアマネジャーがAさんの担当となる。週3回のボランティア以外で月に1回若年認知症デイケアへの通所開始。デイケアでは園芸の手伝いや利用者への飲み物配膳など、役割を持って参加中。

(6) Aさんの気持ちの変化

自分が誰かの役に立てることが**嬉しい!**
やりがいを感じている!
ボランティアが**楽しい!**
認知症である**自分を認めてくれる**場所がある。

「認知症だとわかり今後どうしたらよいのか、皆さんと関わることで考えられるようになり良かった」と話されるようになった。

通所Bスタッフ
の皆さん

ボランティア
仲間

近隣住民

家族

民生委員

ケアマネジャー

デイケア

妻も自分の時間を取り戻し少しづつ笑顔が見られるように

行政

包括
相談員

推進員

認知症疾患
医療センター

障害者就業
支援センター

生活支援
コーディネーター

ボランティア
活動センター

さっちゃん
お福分けネットワーク
(ボランティア)

キャラバン・
メイト

介護者の会

(7) 支援のなかで感じた課題

① つながる先がほとんどない

- ・ 新型コロナウイルスの影響で就労先や居場所が見つからない。
- ・ 認知症について理解、対応できる人がいないため一緒に活動することが難しい、ボランティアの人数が少ないためAさんの見守りに人員を割けない等と断られることもあった。

② 本人・家族が安心して認知症について発信できる環境ではない

- ・ 「認知症は周囲に迷惑をかける」という思いから自主的に退職され、自宅にこもりがちな生活を送るなど「空白の期間」が存在し制度利用や社会参加の機会を失っていた。
- ・ 診察時の相談対応以外で妻の思いを受け止められる場所がなかった。

切れ目のない支援、本人発信支援にむけて
若年性認知症についての普及啓発・支援体制の整備
が大切であることをあらためて感じる機会となった。

最後に・・・

(今後の取組みに対する認知症地域支援推進員としての思い)

- 認知症疾患医療センター看護師、若年性認知症コーディネーターからの提案で推進員も協働し、R2年度若年性認知症多職種連携会を開催。今後も多職種連携会を継続しサポート体制作りにも努めていく。また、連携会では若年性認知症の方を支援する機会がほとんどないとの意見も多かったため、研修会等を開催し支援者の対応力向上を目指したい。
- ケースを通じて顔の見える関係性が構築されることで、新たな居場所づくりの機会につながっている。推進員として人と人とのつながりを大切にし、若年性認知症の方と「共にあゆむ」人を増やしていきたい。
- 何よりもまず本人の思いに寄り添い、共に考えていくことが大切だと感じています。そういった関わりの中からその方の望む暮らしの実現にむけて活動していきたいと思えます。

